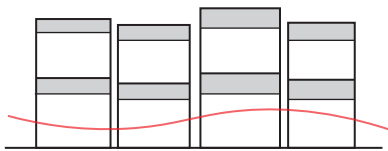


01. 受け継がれてきた町家の特徴

連続する軒による揺らぎ

わずかに高さの異なる軒が連続してくことで街並みに揺らぎが生まれる。また軒下は半公共スペースとなり隣近所との交流が生まれる。



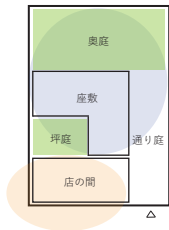
坪庭と奥庭

坪庭は部屋と部屋の間にある小さな庭であり、奥庭は家の奥にある座敷に面した庭。

坪庭は其中で過ごすための庭ではなく観賞用の役割を果たし、壁により一部のみを切り取って観賞される場合もある。

半公共的な空間から私的な空間

大通りに面した軒下と店における公共的な空間から台所や座敷といった生活の場である私的な空間へ変化する。壁に限らず2つの空間の間は暖簾や坪庭で区切られる。



02. 減少する町家

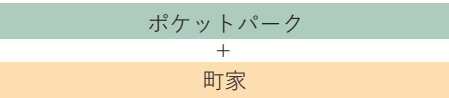
京町家は継承者不足や火災による焼失で毎年約800軒ずつ減少し、現在その数は約4万軒。

町家は軒下での交流、隣近所と協力し合うといった生活文化が形として表れているため、町家が失われることは軒を連ねる揺らぎのある街並みが失われるだけでなく、生活文化も失われてしまう可能性がある。

04. まちの隙間のポケットパーク

ポケットパークは都市の中のわずかな空間を利用して歩行者や住民に休息や語らいの場所を提供する。しかし、空き地の利用として良い例であると同時に周囲の建物との連続性には乏しく、街に穴が開いているような印象を受ける。

町家の特徴にポケットパークの特徴を重ね合わせることで相乗効果による新たな空間を目指す。



敷地

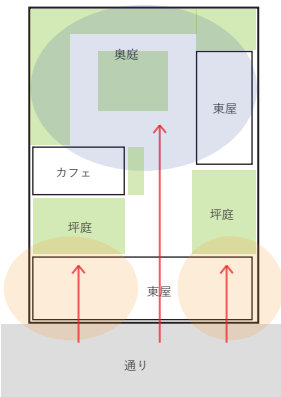
03. 積み重ねる「和」という考え方

「和」は時代を超えて新たな解釈や技術、挑戦の積み重ねによって進化してきた
→常に上書き可能で自由な概念
⇒概念を拡大しながら、またそれらの概念を組み合わせながら新しいものができる
⇒跡地となった土地では周囲との関わりという形で以前の建物は記憶のように残る

05. 配置計画

通りに面して周辺と勾配を合わせた屋根を持つ東屋を配置する。

坪庭と奥庭ができるようにカフェ、東屋、植栽を配置し、通り側と奥側に滞留空間をつくる。軒下のような交流がうまれる空間から個々で落ち着いて過ごす空間へ変化させ、町家であった土地にポケットパークを重ね合わせる。



平面図 S=1:100



敷地：京都府京都市東山区祇園町（花見小路通） 敷地面積：200㎡

